

いかにして英文雑誌に論文を掲載するか

大塚 啓二郎¹

How to Publish English Articles in Journals

Keijiro OTSUKA (National Graduate Institute for Policy Studies)

It is enormously difficult for us to publish articles in international journals, all of which require English. Yet, without publishing English articles in international journals, our research contributions will never be recognized by the world. In order to be successful, we have to be highly ambitious, to read incredibly large amounts of English literature so as to understand nuanced expressions, perhaps to sacrifice education in order to focus on research while young, and to actively participate in international conferences and workshops, which are nothing but battlefields for us. Despite all our efforts, however, shrewd referees may find limitations and slight drawbacks in our articles, and recommend their rejection to the editors. In order to overcome such difficulties, this article attempts to give advice on the publication of English articles in journals based on the author's own experience.

Key words : globalization, English journals, ambitions, advice based on own experience

1. はじめに

英文で査読付きのジャーナルに論文を掲載することは、決してやさしくない。また、そもそも査読付きでない英文ジャーナルなどはない。投稿論文が少ないために、メールを流して投稿を促しているジャーナルもあるようだが、それは評価の低いジャーナルであって、たとえ論文が採択されてもそれを読んでもくれる読者はいない。ある程度以上のジャーナルであれば採択率は低く、筆者がよく知っているジャーナルでは15%程度である(註1)。おまけに、ノーベル賞クラスの研究者のための「予約席」があるから、「普通の人」にとっての採択率はさらに低くなる。最近ではインターネットを使って簡単に投稿できるため、ある程度以上のジャーナルでは論文の投稿数が多くなり、困った編集者側が“Desk Rejection”と称して、チーフエディターが論文の審査をレフリーに依頼することもなく、しかも理由も付けることなしに論文を棄却するケース

が増えている。棄却されても、反省材料になるようなよいコメントがもらえればいいのだが、Desk Rejectionでは、投稿しても何の勉強にもならない。私自身も、これをやられて何度も落胆させられている。

論文がレフリーに回されると、投稿した研究者を見下すような横柄なコメントが返ってくることが多い。なるほどと思えるようなコメントをもらえることは稀であり、納得できない理由で棄却されることが圧倒的に多い。苦労に苦労を重ねて書き上げた論文が、こういう扱いを受けることは我慢ならないし、辛辣なレフリーレポートを読むと、心が折れそうになる。

私自身は、レフリーをするときにはできるだけ丁寧にコメントするように心がけている。特に「棄却」という判断の場合には著者に納得してもらうように、細心の注意を払ってコメントするようにしている。しかし残念ながら、そういう心掛けの人は少ないようだ。また、レフリーは決して神様のように公正でも公平でもなく、えこひいきや差別も頻繁にある。

だからといって、ジャーナル論文なんか無視してしまおうということにはならない。このグローバル化した世界で、英文のジャーナルに論文を出していなければ

¹政策研究大学院大学
otsuka@grips.ac.jp

ば学問をしたことにはならない。日本語で文章を書いても、日本人しか読めないからあまり意味がない。研究者である以上、必死になって英文のジャーナルに論文を掲載するように努力しなければならない。記号と数式の世界である自然科学と違って、ストーリー性が求められる経済学の実証研究の論文を書くことは難しい。辛く厳しいことではあるが、これからの日本の農業経済学者は、もっと積極的にこれをやらなければならない。さもなければ、学会の存在自体が疑問視される事態になるであろう。あるいは、現在すでにそうなりつつあるのかもしれない。しかし、農業経済学は世界的に重要な学問分野であることに変わりはない。食糧生産の確保、自然資源の保護と地球環境、貧困削減等々、これからますます重要になるに違いない農業経済学的テーマが、いくらかもある。

筆者自身は113本の論文を英文雑誌に掲載しているが、その道のりは想像を絶するほど険しいものであった。1979年にシカゴ大学で博士号を取り、いっばしの農業経済学者になったつもりだったのだが、最初の10年間近くは散々な目にあった。論文を書いて雑誌に投稿したものの、棄却ばかりで暗澹たる日々が続いた。学問は自分に向いていない、あきらめたほうがいいと、何度も思った。駅のホームで、「このまま電車に、……」と思ったことも幾度となくあった。

同年代の研究者を見ていると、潜在的能力は高いのにジャーナルに論文が出ず、そのままあきらめてしまった人が数えきれないほどたくさんいる。あきらめてしまうと、実力は確実に落ちていく。要するに、「雑文」しか書けなくなるのだ。ダメな人は所詮ダメなのだと思うが、ダメでないのにダメになってしまうケースがあまりにも多いのである。それが問題だと思う。筆者も、完全にダメ人間になりかけていた。そこで以下では、少しでもそうした悲劇が起こらないように、筆者の経験をベースに考えたことを述べて、読者の参考にしてもらいたいと思う。

2. いかに研究に挑むか

1) 志を高く。英文雑誌に論文を出すことは至難の技であり、精神的に苦痛であるから、「高い志」がなければそれを実現することはできない。英文で論文を出して、世界で勝負しようという志のない人は、そもそも研究者を目指すべきではない。筆者の恩師である速水佑二郎先生は、「人類の知識のストックを増やす

ことに貢献したい」と言っておられた。さすがに速水先生である。筆者自身は、研究者になろうと思った時から「研究で貧困削減に貢献する」ことを目指してきた。だから例えば、国際協力機構(JICA)がやっているアフリカのコメ増産プロジェクト(CARD)に、実証研究を通じてアドバイスをしている。それは、自分自身の初心を貫くためである。

2) 教育から「手を抜け」。ダメでない若手がダメになる大きな原因は、大学の雑務と学生の指導である。研究時間が少なければ、世界では太刀打ちできない。雑務が多いのは困ったものだが、それにはとりあえず打つ手がない。あえて言えば、真剣に研究しているスタッフが多い大学では、つまらない雑務は少なくなるように思う。問題は、学生の指導である。若手を見ていると、教育熱心な人があまりにも多い。しかし、それは失敗のもとである。英語で論文を書けない人が、まともな教育などできるはずがない。だから、もしまともな指導者になろうとするならば、まず自分自身が英語で立派な論文を書けるようにならなければならない。自分の研究者としての一生を考え、若いときには「教育から手を抜く」くらいに思っているほうがいい。自分が英文で論文を出せるような研究者になることが、立派な教育者になる最善かつ最短の道である。

3) 論文を書くことが研究の基本。「あの人は論文は書かないが、経済学はよくわかっている」という話をよく聞くが、私は絶対にそれを信じない。論文を書かないと、何をわかっていないかがわからないのだ。「あれっ、どうだったっけ?」と、わかっていたと思った理論が、論文を書いているとわからなくなることがよくある。そこでじっと考えると、はじめてその理論のエッセンスが理解できるのだ。論文を書かなければ、他の人の論文は理解できないし、絶対に実力はつかない。逆に、「この人はダメだろうな」と思っていた若手研究者が、どんどん論文を書いて、のちに信じられないほどの実力をつけたケースは枚挙にいとまがない。

4) テーマの選択は死活的に重要。何が専門領域で重要になりつつあるのか、何が未解明の重要なテーマなのか、何が自分の性格にフィットするのか、多面的な考慮をしながら慎重に研究テーマを選択しなければならない。筆者自身は、(1) 緑の革命と所得分配、(2) 小作契約の理論と実証、(3) 中国の経済改革、(4) 土地の所有権と自然資源の管理、(5) 貧困削減と

(註1) 筆者が編集委員を務めている *Economic Development and Cultural Change* と *Agricultural Economics* では、ともに採択率が約15%である。

非農業での雇用機会、(6) 産業集積の事例研究など、これまでテーマを大幅に変えながら研究を行ってきた。しかしその都度、新しいテーマの選択には十分すぎるほどの注意を払ってきた。研究の流れから先を読んで、「他人より半歩先に行く」ことを目指した。筆者は凡人であるので、「一歩先」に行くほどの洞察力は残念ながらなかった。だから例えば、いわゆるエイジェンシー理論がはやり始めた1980年代はじめに、いち早くそれを小作契約の研究に取り入れた。また、1990年代初期に、中国研究ブームのわりに中国研究者が現場に足を運んでいないのを見ぬいて、農家調査を応用して「工場調査」を主体とした中国研究をやった。バスケットボール部やボート部に所属し、少人数のグループをまとめることが中学、高校、大学時代を通じて得意だったので、この性格を利用して数人規模の国際共同研究を数多く組織した。余談かもしれないが、相手を思いやる日本人の性格や行動様式は、東アジアから南アジア、さらにアフリカでは、西欧人以上に「国際的」であると思う。だから、日本人研究者にはアジアとアフリカの研究を推奨したい。

5) 国際会議は戦場だ。国際会議は、勝つか負けるかの戦いの場である。そう思わなければならない。もちろん、自分の報告を立派にやり遂げることが何よりも大切である。しかしそれに加えて、他の参加者の発表論文を事前に読めるだけ読んで、できるだけよいコメントをたくさん用意して、積極的に発言することがきわめて重要である。その結果、多くの参加者から評価を得なければならない。少なくとも「あいつはやる気がある」という評価は得たい。国際会議は和気あいの雰囲気があるが、その陰でみんなが参加者の実力を見定めようとしているのである。

6) 国際会議で知り合いになった研究者仲間が、やがて研究者としての自分の人生の財産になってくる。国際会議に行かないというのは戦いに参加していないに等しいし、国際会議に行っても何も発言せずに帰ってくるのは「敗北」以外の何物でもない。筆者が会長をしていた国際農業経済学会のブラジル大会に、日本人研究者の参加が少なかったことには落胆した。国際会議で親しくなって、やがてその人が一流雑誌の編集者になり、私の論文に対して好意的な対応してくれたことがいくつかある。アンフェアな気もするが、人間のやっていることだから仕方がない。よく考えれば、筆者の研究の基本姿勢を評価してもらったことが優遇につながったのであって、アンフェアではないと言え

ないこともないかもしれない。

3. いかに英文で論文を書くか

アメリカやイギリスやオーストラリアに留学したら英語が書けるようになる、と思ったら大間違いである。欧米の大学で、大学院生の論文の英語を直してくれる教授はまずいない。英語をフィーリングとして感じるようになるまで、徹底的に英語の文献を読み込むことが、英文で論文を書けるようになることの絶対的な条件である。自分が日本で指導したことのある日本人学生で、立派な英語が書けるようになった人は何人かいる。英語が母国語でないことはハンディだが、ここは頑張るしかない。また、ただ漫然と英語の論文を読むのと、「英文を書こうとして読む」のとでは大きな差が生まれることは認識すべきである。志が高ければ、英語は必ず書けるようになる。

英文で論文が書けるように必死に努力することは当然として、以下では、英語で論文を雑誌に掲載するためのいくつかのツボを指摘しておこう。

1) 読む人の立場に立つ。とにかくわかりやすい文章を書くように努力する。「これでわかるかな?」と、何度も何度も自問自答し、何度も何度も文章を書き直す。文章を書くということは、自分の主張を「最も効果的に」読者に伝える作業である。文章を書くときは、まずわかりやすい文章を目指すべきであり、まかり間違っても格好いい文章を書こうと思ったりしてはいけない。格好よさを追求するのは、文章の達人に近づいてからやることだ。とにかく、わかりやすく書く(註2)。表や図や節のタイトルは適切か、表や図に単位は表示してあるか、文章にむだな重複はないか、引用文献のスタイルに問題はないか、細部までチェックし、読者を徹底的にエンターテインする気持ちが大切である。比喩的に言えば、われわれはカラオケで歌うのではなく、プロのシンガーとして観客を魅了しなければならない。

2) とにかくたくさん書く。生産量が投入量の関数であるように、文章を書く能力は書く量の正の関数である。たとえジャーナルに落とされても、とにかく書き続ける。書けば、必ず書けるようになる。英文を書くと思いながら英文を読めば、英文の書き方はよい方向に変わってくる。筆者自身、目に見えるような成果は出なかったが、1980年代前半に論文を書いていたことが、1980年代後半に「離陸」することにつながったと思う。多分、徐々に書く能力がついていった

(註2) この点は、日本語を書く場合も同じだと思う。

のだと思う。

3) 100文字のアブストラクトは重要だ。必ず最初を書く。アブストラクトでは、何が論文の最大の貢献かを単刀直入に示す。意外に、これがわかっていないことが多い。筆者も、論文を書くまでこれがわかっていなかったことが何度もあった。あまり言いたくないが、つい最近でもレフリーに「この論文の最大の貢献がアブストラクトで書けていない」という指摘を受けたことがあった。これには、恥ずかしさのあまり赤面した。本文を書く前にアブストラクトを書いて、何が論文のセールスポイントかを、書いている人自身が的確に認識していなければならない。これができていないと、論文全体の論点がぼやけてしまう。

4) 「序」も決定的に重要だ。うまく書けていないアブストラクトと、わけのわからない序が、Desk Rejectionの大きな原因だ。序は、起承転結にしたがって書くことが重要だ。「起」は、話を起こすところであり、論文の主題を大きなコンテキストの中に位置付けることが大事だ。「承」でやることは、簡単な文献のレビューと事実のすりあわせだ。そこで、「大事なことがまだわかっていない」ことを浮き彫りにする。「転」では、論文の目的を述べる。この「転」が序の一番の勝負どころである。

例えばだが、第1パラグラフでは、「あのねー、貧困問題は相変わらず人類にとって重要な問題ですよね……」、第2パラグラフで「それでね、こういった研究やああいった研究があるんですけどね……」、第3パラグラフで「でもねー、こういう重大な現実が見落とされていると思うんですよ」、そして第4パラグラフの「転」で「だからこの研究をするんです」と書く。この文章の構成で、読者にこの研究の重要性を伝えることがポイントだ。筆者は、序の最初の1行目から、「転」で書く「この論文の目的は」が、映えるように書くことを心掛けている。「論文の目的」を述べるのが序の目的であり、序全体がこの目的のために、構成されていなければならない。

序に「結」はなく、論文の構成の紹介をすればよい。なお、上述したのは筆者が経験から考え出した1つのパターンで、絶対にこれに従わなければならないというわけではない。絶対にしてはいけないのは、第1パラグラフの最初や、第2パラグラフあたりで論文の目的を述べることだ。それは、映画のクライマックスシーンが、映画の最初に出てくるようなものだ。それでは筆者の気持ちは、読者に伝わらない。クライマックスの前に、それを見て感動するようなお膳立てが必要なのだ。

5) 壁にぶつかったら幸運だ。研究をしている最中に、「どうしてこんなことになっているのだろう？ わからんなー。まいったな」、そんな状況をここでは「壁にぶつかる」と呼んでいる。壁にぶつかれば、精神的には苦しい。しかし逆に、壁にぶつからなかったら不運だ。壁にぶつかることなく、思い通りの分析結果が得られた場合、その論文に対する読者の反応は、「そりゃそうだ」でおしまいだ。これでは2流か3流の論文だ。壁にぶつかったら、自分の理論の知識、現実認識、計量の知識を総動員してそれを乗り越える。この3つがあれば、乗り越えられない壁はない。だから、常に理論を勉強し、現実を理解し、エコノメトリクスの知識に磨きをかけておかなければならないのである。壁を乗り越えて完成した論文に対する読者の反応は、「なるほどね」になる。これは一流の論文だが、それしか読んでいない大学院生などは、論文の完成前の苦労はわからないかもしれない。

6) 編集長からのメール。苦労したあげく、論文を投稿したジャーナルの編集長から“This paper cannot be accepted in its present form”という返事をもらったらしめたものだ。編集長とレフリーを「神様」扱いし、決してたてつくことなく、彼らが論文の中味を忘れる前に迅速に、そして誠実に（あるいは誠実に見えるように）再投稿することが鉄則だ。そうすれば採択の確率が高い。筆者自身の経験では、95%である。なお、編集長は「レフリーの顔を立てる」ことを原則にしていることが多いので、編集長とレフリーは同等に大切に扱わなければならない。反論しても、まず得することはない。それをやっているくらいなら、次のジャーナルに投稿したほうがいい。

7) 話をするのが独自のアイデアを生み出す源泉。一時代前なら、アメリカでやった推定方法を日本のデータに適用して推定したような論文があった。しかし、そんな論文は今も昔も通用しない。ジャーナルに掲載されるような論文を書くためには、独自のアイデアを生み出さなければならない。ではどうするか。筆者の経験では、論文のアイデアは論文の内容を他の研究者に説明しているうちに生まれることが多い。他の研究者に話をするためには、頭の中を整理する必要があるからだ。だから、常に優秀な仲間と質の高い話をしていることが重要だ。あらゆる機会をとらえて、研究の話をするのがよい。だから人事面では、少しでもできるよい人を採用するように努力すべきだ。自分の研究を理解してくれる仲間がいない孤島のようなところで仕事をしていては、研究の能率は一向にあがらない。また、そうした同僚に論文を読んでもらって、

率直な指摘や評価をもらうことも重要だ。

私事だが、最近出版した『なぜ貧しい国はなくならないのか』（日本経済新聞社、2014年）の原稿の段階で、かつての教え子たちにそれを読んでもらって厳しいコメントをもらったことが、内容の充実大いに役立った。

4. む す び

研究者の仕事とは、「公共財」を生産することだと思ふ。だから給料や研究費に税金が使われている。筆者は、英文の雑誌論文が研究者にとって最も重要な公共財であると思っている。日本語の論文では、ローカルな公共財であって、世界中の研究者の目に触れることはない。辛いことではあるが、われわれの使命は英

文の研究論文を、少しでもよいジャーナルに1本でも多く発表し、「国際的公共財」の供給に貢献することにあると思う。

著書や編書の中の論文は、ジャーナル論文と位置付けが違う。著書や編書は補完的な論文を集めることで、新しい価値を創り出しているのだ。だからそうした書物に収められている論文は、もとを正せば雑誌論文であることが多い。著書や編書に意義はあるが、基本はあくまで雑誌論文である。

本論では、英文で雑誌論文の発表を目指している研究者のために、筆者の経験を語ってみた。もし筆者のアドバイスが、志の高い若手研究者に少しでも役に立てば幸いである。

要旨：日本人が、英文の査読付き学術雑誌に論文を掲載することは容易ではない。しかしこのグローバル化した時代に、日本語で研究論文を書いていたのでは学問をしたことにはならない。高い志を持って、英語の論文に挑むべきである。英語の微妙なニュアンスがわかるまで、英語を徹底的に読むことも重要である。また若い時には、教育を犠牲にして研究に集中しなければならない。国際会議は、研究者の戦場でもあることは理解すべきである。いろいろと苦勞して投稿した論文も、意地の悪いレフリーにあらを探されて棄却されてしまうことも多い。本論は、英語の論文の雑誌に掲載しようとしている研究者に、著者の経験からアドバイスをしようとするものである。

キーワード：グローバル化、英文学術雑誌、高い志、経験的アドバイス